

# 希望 21

ありふれたことだけど  
かけがえのない  
希望がここにある

People's Hope for 21 century

平和・自治・共生

1997年 4月号

No.19

1部 200円 年間購読 3000円

神奈川県相模原市上鶴間2973-3-110

TEL & FAX 0427-40-4794

郵便振替：00100-1-97125 希望21

## 泥船を人々の船にする 自らがんばる応援団、 イーじゃない！？

(未来はみんなでつくり隊：石田伸子)

前号で金子さんの巻頭が「土井さんがんばれ」でしたが、がんばれ、じゃなくて、「がんばろう」のほうが明確かな、と思っています。国会が衆議院9割の賛成を以て、自民・新進・民主・さきがけ大同団結で、沖縄の人々の声を無視して軍用基地特別措置法を成立させるという状況がまざまざ見えた、今ひとしお。私たちの大同団結の道をひらくためにどうできるか、ということです。新しく「政治」をつくるしかない。非常に素直に、こういう状況をどうやったら変えられるのか、考えました。私たち「未来をみんなでつくり隊」では、保坂さんと話す会を企画し、「市民の絆」の一角を占めたいと思います。

「泥船にのるなんて」という言い方もあるようですが、それは発想がちよっと違うかなと思うんです。安全な船に乗ろうとか、勝ち馬だから賭けたいとか、思っている訳じゃないからです。政界再編のなかで、運動は分断し、人々は孤立の度合いを深めている現状で、沈むかもしれない船であっても、沈まない方が人々の利益になるかもしれない。「うまく行かないんじゃない？ ホントに社民党を信用してだいじょぶ？」というような意見もあるようです。でも、うまくいくと決まってるものなんて、そうそうないんじゃないですか？

できるだけ間違わないようにして、完璧正しいことを目指すんじゃ、引き算にしかならないんじゃないでしょうか？ 今より、これまでより、よくいくようにするためにどうするか。できるだけ多くの力を合わせて、ダイナミズムを生むような方法を、考えなければなりません。じゃないでしょうか。そのために何をすべきで、何ができるか、です。

国政には今、より広く市民が結集できる軸が必要です。平和、自治、共生、が希望のスローガンですが、平和を脅かす特措法も、共生を競争にする規制緩和の大会

唱も、止めうるに足る勢力がなければ、人々は国策に自治と平和を奪われ、資本に丸裸でさらされるばかりです。私たちは、地域に自治をつくっていき、そのつながりをもって、国政を規定する力を下からつくりあげていくことを目指していますが、その過程を「市民の絆」を軸につくっていくことに挑戦する、といえいいでしょうか。前回の衆院選で市民派議員が「市民の政党として再生させる」ということで入ったという機を、私たちがつかんで、つくりかえていきましょう。そして、そうすることによって「労組におんぶにだっこ」等、社会党の総括としてある中身を、自らそうでないものにしていくことを通して、まともな政党を再建していこうとすることは、理にかなっていると思えます。

絶対正しいとか、絶対に間違わないとかっていうのは、ないんじゃないでしょうか。そういうものを探すのではなく、どこかにあると考えるのではなく、間違ったりもするでしょう、うまくいかないこともあるでしょう、そのつど状況と格闘し、直しながら、よりよくできるように、私ら自身が力をつけていかねばと思います（力、ないですから）。どうやったら変えられるのか、ただその一点から。《下から社民党を再生させて、市民の国政への回路を創出すること》《それを市民が主体的になってすすめる過程》《それ自体を、私たちがひきうけること》が今、必要なことだと思うのです。それを応援団というなら、そりゃそうでしょう。「あんたがんばれ」じゃなくて「一緒につくれるように、がんばろう！」という応援団です。政治を変えるダイナミズムをどこからつくるのか、ということなんです。単純ですが、いずれにせよ主体の問題。はじめはぼちぼちだったとしても。

# 真近で聞いた辻元清美

(社民党・市民連合、近畿比例区)

3月8日(土)、大阪の門真市で希望21・門真主催で「辻元清美が談会 in 門真」を行った。辻元議員の地域座談会のようなものは、この企画が初めてのこと。参加者25名(うち地域周辺より8、週刊「金曜日」読者が15～重複あり)。



粋な皮ジャン・デイバック、国会議員は1人で歩いてきた。秘書は別の場所を訪問中とでフル活動の様子。みんな床に座って清美トークライブは始まった。

登院にいたる数々のエピソードや国会内外の活動、現実のカベとの格闘、そして沖縄問題の展望にいたるまで、様々なことが話されたけれど、これのごっつうおもしろい!大爆笑も度々。試行錯誤の悩みや苦しみも率直に語られ、みなさんだったらどうします?と聴衆もまた問い直される。「金曜日」にも書けない話も談会では話ってくれた。(全部はここでも書けないが)以下に再構成してお伝えする。(構成・報告;戸田久和)



## 社民党を市民政党内

★(清)労組の大半はいなくなった。すごくチャンスかもしれない、可能性はある、と思う。

★私は、立候補条件のひとつとして、党員じゃなくて、「市民連合」として社民と会派を組む、としました。今も変わっていません。

★「市民」ということを、私は組織の決定じゃなくて自分の決定で動く人、と定義している。労組が決定したからここに入れる、というような人は市民的体質のない人だと思っている。

労組に入っていようが、どこに入っていようが、自分の判断で動く人というのが「市民」の基本ではないかと思っている。そういう人とはどんどん連帯していきたいと思うんです。

## 「15議席・市民派若干」の弱さと強み

★(清)自民党の数の力は圧倒的。社民15が抜けても自民は過半数取れる。

★でもむこうも弱みがあるんですよ。というのは、自民党の現執行部にとっては私らをうまくさばかんと、保保連合派に主導権取られる、という自民党内権力闘争がある。

★そう意味で私ら「市民との絆派」は、ある程度力を

## これを実現したい!

### だから私は議員をやっている。

★(清)ピースポートやってて、政治のカベというものに何回もあたってきた。

★政治から逃げるのではなくて、政治をどう変えるか、ということを考えないかなあ、という時期にきてたんですよ。

★NPO法案と情報公開法のいいのを作ったら、だいぶ日本は変わると思う。このふたつはなんとしても実現したい。それから朝鮮半島の人たちとの関係の正常化・・・

## 清美流ゲリラ戦、たとえばこんな

★(清)去年から自民党の熊代という厚生官僚上がりの担当議員を、与党案出してんねんから言うて、NPO法案作ろうという集会に連れて行ってたんですよ。集会やっているみんなには言うてあるわけ、「総攻撃してくれ」って。(爆笑)それで帰りに熊代さんと話していて「厳しいですねえ」とか。(爆笑)そしたらだんだん変わってきましたね。

持ってるんですよ。たまたま。

★私なんか、席順3番目で与党としては投票順番のトップだから目立ってしゃーない。私も緊張するけど自民党としても緊張している。

★それやったらそれを楯に取って、どういう政治的成果を細かい所でも取るか、という戦法しか今取れないんです。外から見て批判されることがあってもね。

## 市民派議員もつらいで!

### 誰にも言われへんわん!

★(清)こういう会を持って、いろんな人と意見交換したり話をしたりするのが、私にとって一番ストレス解消っていうか。だって言われへんわんもん!誰にも。

★市民運動の集会へいったら物凄く批判されるわけ。なんだあの法律は、とか。でもしょうがないですね。そういう仕事ですわ。これは。

★請願とかいっぱい来るし。1日20件くらい。あれやってくれ、これしてくれ、とあらゆる問題がくる。さばけないんですよ。ちょっと今忙しいので、と言うと「あっ、変わった!」(笑)とか言われて。

## 私は、この両方から逃げないようにしようと思ってます。

★(清)サーフィンに乗って前に進んでいく、というイメージです。サーフィンは風とか波によってひっくり反ったりするわけで、それが政局なんですよ。ちょっと政局がかわると、その政策が実現できにくくなったりするので、政局にもある程度影響力とか自分なりの方針を持たないと進めない、と。

★もうひとつは、政策を実現させるとしたら、永田町では100のうち88%は思惑調整なんですよ。あとの12%くらいで政策論議をやっていると思います。

88%の中の半分は自分の党のなかでの思惑調整なんですよ。さらに他党との思惑調整があつての実現なんですよ。

★運動はここ(12%の政策論議)を言っていればいいところがあったんです。純粹というか。これを政治の場で本当の意味で実現するためには、88%の(思惑調整)部分をくぐり抜けないといけない。付きあいで飲みにもいかなアカンしさあ、いろいろ力関係を計りながら、やっとたどりつける。

## 沖縄特措法について

★(清)ビジョンを出していかなければならない。即時撤退と言ってもムリ。何年間でどういうふうな撤退にむけてやっていくか、のビジョンを作らないとアカン

という限界を感じている。

★すごくジレンマに陥っている。特措法改悪に反対して座っていると思うが、そのビジョンがない限り、単に反対したということにすぎなくなる。

★連立組み替えにつながるかどうかかわからないが、反対貫く意義はあると思う。

## そうや、私は敵陣工作兵やわん、せやけどなあ。

(戸田)3つの要素が必要だと思うんですよ。基本として民衆自身の大きな動き、そしてそれを反映して国会の中ではっきり反対してくれる勢力、今共産党だけになっちゃったけど。それと清美ちゃんらのような「敵陣工作兵」(笑)お互いがある側面だけを見て、これがアカンとか非難しあうんじゃないかとトータルに見て全体を良くしていくということだと思うんですよ。

★(清)そう、敵陣工作兵やね。でもやっぱりね、例えば5万人くらいで国会取り囲むとかやれば変わりますよ、ちょっとは。いつも思うんですよ。後からもっと押してくれへんかなって。NPOのときもそう思った。自民党に何千人と押し掛けて囲んでくれよと。



## ザ談会を終わってみて。

「1人で自由にやってる人」という印象が強いかもしれないが、辻元清美は創設14年、25～40人の専従者とともにピースポート事業をやってきて、なんでも仲間を募り、討論し協同するのがライフスタイルの人だった。自分の位置や力関係を冷静に認識しつつロマンを実現していくタフ・ネゴシエーター(したたかな交渉家)でもあった。

次の集会を控えての正味1時間半では短すぎたけれども、かなり刺激を受けて楽しめた企画だった。

今 この人に聞きたい!

# 脇田 憲一さん

〔はじめに〕

脇田さんは、総評のオルグ時代から、高槻生協理事、高齢者福祉協会、そして、高槻市議と、北摂、高槻という地域での活動を続けられています。今回の話では、地域へのこだわりは、どこからくるのかを中心に語っていただきました。朝鮮戦争当時の日本共産党の軍事部門であった「山村工作隊」についての総括、特に「文化的遺産」の話は、ともしれば、短いスパンで運動をとらえがちな僕らへの貴重なメッセージとして受けとめるべきだと思いますし、地域で運動を担っていくことの大切さを改めて感じました。

～最初に、脇田さんが北摂という地域にこだわってきた運動の原点みたいなことを話していただけますか？

38歳の時に総評のオルグになるんですよ。運動としては春闘中心でしたが、盛り上がった時期の担当をしていました。しかし、75年のスト権スト以降、運動が退潮してきましたね、あまり面白くないし、総評をやめようと思ったのですよ。

そこに、地域担当をやらないかという話がありましてね、北摂に配属されました。その時に、いろいろ考えたんですよ。1982年、パート110番の運動が始まったりして、地区労を中心とした地域の労働組合の横のつながりを軸にパート、未組織労働者の運動が、全国的に広がってきましたね。

特に未組織労働者、パート労働者の組織化については、戦後の労働運動は成功しなかった。つまり、社会的な労働運動として根付かなかったというのが、僕の問題意識でした。

そんな中で、公労協の運動が高揚してまして、首を切られた幹部を抱えて、なおかつ役員にかつぎだして当局と団交するわけですね。こんな運動というのは、民間では考えられない、企業別組合では考えられないということで、社会的労働運動の可能性がそこにあるのではないかと。総評という社会的に市民権を得ているナショナルセンターで活動することで社会的労働運動が日本でどんなふうな形で根付いていくのかをみていきたいというのが、総評オルグを始めた時の気持ちだったんですよ。ところが、そうではなかった。

それで、日本の戦後の労働運動についてきちっと総括しなければいけないと思っていた矢先に、地域でやってみないかという話があったのです。僕の労働運動のもともとのルーツが北摂地域の職場でしたから、原点に戻って考



えてみようかと思いました。

ところが、身体を壊しましてね。ちょうど50歳の時のことです。医者からも現職復帰は無理だと言われて総評を退職し、療養しながら「パートふれあい相談室」というのをつくりまして、パート労働者の駆け込み相談をボランティアではじめたのです。同時期に高槻生協再建の話がありましてね、相談にのってくれということで、そこから今日までできているわけです。

生協事業というところへ足をつっこみましたけど、やはり、労働運動、未組織労働者の問題というのは、常に問題意識として持ち続けていますね。もう一遍、労働と生活というトータルな関係のところですね、戦後の労働運動を自分なりに見直したいというのが本当の問題意識なんです。だから、生協と未組織労働運動と両方を視野に入れてやっていきたいというのが、地域のこだわりということのはじまりだと思っています。

～80年代、地域合同労組というような運動の流れにあたるわけですか？

地域ユニオン、ここでは「北摂トータルユニオン」ですが、生活者トータルユニオン運動というのを提唱したのです。それは、労働と生活というのをトータルに考えようと

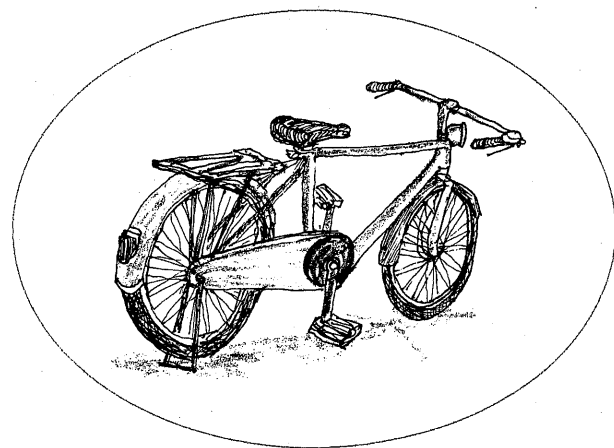
いうことで、単に地域合同労組ということに限定せずに、消費者運動や、地域の様々な障害者の運動だとか、人権の運動だとかをやっている人達と一緒に考えていこう、駆け込んでくる労働者を皆で応援していこうではないかということですね。

コミュニティーユニオンということで、全国的に出てきたでしょう。その流れのひとつではあるんだけど、発想を転換しようというのが僕たちの運動の中にはあったんです。その運動も10年目の総括というところでは、僕は目ぼしい成果というのは残っていないと思っています。生協運動にしてもそうです。結局、戦後の色々なものをひきずってきていましたからね、そのひきずってきたものは、全部駄目やというのが、僕の今の時点での総括ですね。

断ち切って捨ててしまうというのではなくて、どう克服するかという観点がないと、その延長線上では展望は出ないということだと思いますね。その過去の色々な負の部分が運動の疎外要因になってなかなか新しさが出てこないということですね、そうした苦しみというのが、この10年の運動の基本的な性格だとみているんです。

僕は、戦後の運動の負の部分というのがなんであるかということはずっと考えてきたわけです。マイナスの部分というのは克服しなければいけないと思いつつも、マイナスの要素ばかりが目につくんですよ。それをどのように理解していくのかといえば、「負の遺産の継承」ということなんだと思いますね。」

～「負の遺産の継承」ということで、脇田さん自身は「山村工作隊」のことを語っておられるわけですが、その中で「文化的遺産」ということを言われていますよね。



ここずっと振り返って見たときに、僕の今までの運動人生の中で、一番緊張感があった時代といえば、「山村工作隊」だったと思いますね。

政治的な成果、運動的な成果ということでいえば、みなマイナス要因なんですよ。未だに日本共産党の党史の中では、あの5年間は空白になっている、歴史から抹殺されています。資料的にも抹殺されているから、研究者も研究の

しようがないわけです。ですから、日本の社会運動史、戦後労働史からも抹殺されているんです。にもかかわらず、僕の中で占める位置はものすごく重いんですよ。

そこに政治的な意味みたいなものがあるのかなと考えると、そこに政治的な意味みたいなものがあるのかなと考えると「いったい、あれはなんだったんだろうか？」とね。自分としては、すごく落ち込むじゃないですか。色々書いていますが、未だに納得のいくものはないですね。

ある時、香川の農民運動を戦前からしておられた植松謙蔵さんという方から手紙をもらったんですよ。たまたま僕の書いたものが眼にとまったんでしょうね、僕の問いかけへのコメントをくれたのです。「政治的評価、価値だとかいうものは、その時々で答えを出さなければならぬ。しかし、民衆自身の中に根付いていくのかということから考えれば、そんなものではないだろう。それは、長い年月を経て色々な人達の伝承によって血となり、肉となっていくものである。政治闘争をやったら世の中変わるだとか、人間が一変変わるだとかね、そんなことはありえない。だから、政治的に、運動的にどうだったのかという観点で考えたならば、答えは出てこない。それは、文化遺産なんだ、文化的に考えなければならぬんだ。」ということ言われたのです。

わずか二、三年の山の中の活動。しかも、活動といってもその地域の人間からすれば、なんにも役に立たないし、子供の火遊びみたいなもので意識の中にも全く残っていない、やったことの中身ということでは、そんなものでしかない。それはあたりまえのことです。ところが、「共産党、共産党」って言われていた兄ちゃんたちが山の中に住んでいたってことは、不思議に人々の意識の中に残っているわけです。

彼等が、なぜ僕たちのことをそんなに覚えているのか、あるいは、その後のことを気にしているのかを尋ねても、かくたる答えはない。しかし、気になっている。その村に何十年後にいってもね、「よく来た、まあ泊まっていけよ」と言われるんです。

言葉で政治とってしまえば、なんかカッコいい感じがあるんだけど、要するに日常を超えた次元の所で存在しているものなのです。その活動には色々な問題があったし、活動の内容はなにも意識に残っていない。また、成果らしきものもなにひとつ残っていないのだけれど、その行為そのものが世の中を変えようとか、人間を変えようとかをめざして、それぞれ職場を捨て、親兄弟も捨て、何もかも捨てて、自分が全身全霊をその活動に捧げるという気持ちでいたことは間違いないですからね。やはりあそこで日常をすごしている人達にしてみれば、全く違う次元の存在なんですよ。ですから、村の人達にとっては、すごく印象に残っているのだと思います。

民衆の中に何か残っていく姿というのが、文化遺産だと思うのです。あるいは、地域社会で暮らしている人達の中に何らかの形で影響を与え、残り、伝承されていくふうなものが文化だだと思います。政治なり、色々な運

動が文化になるということは、日常の生活の中に根付いていく、伝承されるということであると思います。

ちょっと、表現的には未熟ですが、そのように考えて来たときに、僕としては救われるんですよね。5年に一回くらいはその村を訪れるのですが、非常に懐かしがってくれるし、僕自身は今でも運動を続けているわけですから、「あの時の若者が、今でも続けている…」という感じで一種、仲間的な気持ちを感じてくれているようです。僕たちの関係は、その人の代で終わるかもしれませんが、なにかの形で次の世代へと残っていくと思うんですね。

～政治運動 労働運動といった結果を出していかなければならない運動が文化になるのに一番大切なものはなんだと思いますか？

やはりスパンが違うんだと思う。政治的な運動的な評価は、していかないとそれ自体が維持できない世界でしょう。しかし、運動や政治が文化になっていくかは評価ができないですし、見えませんよね。それこそ、50年、100年というスパンが必要ですよ。

そういう意味では、戦後50年を経た今、どう文化の意味をもつのかを考える時期に来ていますよね。しかし、答えが出るには、さらに50年はかかると思っています。

この50年のツケが、50年後に来る訳です。ツケがどういう形であるか。今までプラスだと思っていたものがマイナスで現れるかもしれないし、その逆もありうるわけでしょう。

「自然を大事にしよう」「弱者を大切にしよう」というようなことは効率主義からみればマイナスなんです。そのマイナスを切り捨ててきたのが、「高度成長経済」でしょう。

右も左も、生産力や効率をプラスとしてきたわけですよ。

ところが、今は今まで切り捨ててきたものを再評価しようとしてきているでしょう。環境問題がそうですし、生き方、暮らし方…、あらゆる所でそうでしょう。

そういう複眼的な視点を自分の中で持たないと、政治上での挫折があった時に、立ち上がれないですよ。僕等と同世代もそうですし、先輩もそうですし、こぼれていっていかないですか。撤退していきませんか。それは、やはり次に立ち上がるひとつの視点というか、あるいは、文化的な視点、バネをもっていないからだと思います。

共産党の「六全協」で方針転換が出てきたときに、「これはいんちきや」と直観的に思ったんですよね。いくら運動でね、政治的に抹殺しようとしても、僕等はその活動を担ってきたわけですから、抹殺することはできない。やってきた時間と僕等の存在というのは抹殺できないから。

それまでは、僕は、党中央なり党の決議は正しいと思っ



ていました。やりかたがまちがっているんだ、あるいは、僕等を指導した連中が間違っていたんだと、思っていたんですよ。つまり、僕等に直接みえる地区委員会が誤っていたんだと思っていたんです。もとの理想は正しいんだから、党中央の下でもう一度がんばるんだって、思っていたんですよ。ところが、「六全協」が出てきて歴史を抹殺した。その時に僕の中で、共産党はすーっと消えていきましたね。それが、20歳の時のことです。それ以来、私の日共観は変わりません。おそらく日共がそうならば、中国の共産党もそうだろうし、ソ連の共産党もそうだろう、そんなもんかなと、その時に思いましたね。

～ちょっと話が飛びますが、今の日本の政治状況の中で、働く者というか、民衆の立場からいうと、共産党も同じ勢力になるとは思うのですよね。ですが、共産党に対する徹底した不信感が現実にある中で地域で運動を進めていく場合に共産党との関係をどういう形で進めていくのでしょうか。

運動の原点は大衆運動ですから、大衆運動をどのように成功させていくのかというところで頑張っていくのが、活動家だと思っています。

自然発生的に起こってくる様々な運動をただ連続してやっているだけで変わるといえるものではない。政治というのは、どういう風に闘いを展開していくかという戦略戦術を練るかというものだと思うのですよね。そのために政治組織、党が必要だということは、僕は否定しないのです。

ですから、様々な党、政治組織があるんで、それを民衆の側から見て有利なもの、味方になるものは全部利用する、あるいは支持するという視点が大事だと思います。共産党も労働者、市民の闘いや運動にとってプラスになる、有利になる方針だとか、党の影響力だとかは最大限に活用していく、そのために存在するものと思えば、失望したからといって、共産党のやっていることを全部駄目や、絶対関わらない、というのはおかしな話だと思います。

他にみななくなってしまうからね。これは、共産党を応援しなければならぬし、共産党と一緒にやっていくことを追求しなければいけないと思うのですよ。向こうが相手をしてくれないこともありますかね、相手がある

ことですから。そのためにも僕等が力をつけなければなりません。

～現在、脇田さん自身、高齢者の運動をやっているわけですが、そこでの問題意識について話していただけませんか。

2025年には、25%、四人に一人が65歳以上の老人になるわけですが、それはどんな社会になるんやろかということ。若い人達にとっては「大変や！」ということになるし、年寄りにとっても若い人達をあてに出来ないから、自分たちでなんとかしなければいけないということになってくると思っています。

60代というのは、病気をしない限りは、まだまだ働けます。ところが、現在の社会では働く機会がない。若い時のような無茶苦茶な働き方は見直さねばならないし、かといって、60過ぎたら全部リタイアしてしまえ、というあり方もおかしい。だから、両方見直さねばならないと思うんですよ。

今、「高齢者福祉協会」でやっているのは、配食サービスに限定した形ですけどね。要するに、配達するのも高齢者ということで、時給850円で1日2時間半、寝たきりの高齢者や、家事が出来ない家庭に配達をしてもらう。年金プラスαということですけど、遣ってくれる人はたくさんいるんですよ。その中で、リーダーも決めて、自主的にやってもらう。コーデイネートも含めた色々な出会いの部分は、主婦のボランティアでやってもらう。今、すでに20人位の方がローテーションを組んでやってくれています。主婦のボランティアと高齢者の労働参加で自主的な運動体としてやっているわけで、この1年で大体見通しがついてきた。1日60食、年中無休で活動しています。それは一つのモデルケースで、そういうことを通じて高齢者同士の助け合いを組織していく、寝たきり老人を抱えている家族を支えていく構造を作っていきたいと思っています。

ただ支えあうというだけでなく、もっと高齢者に能動的に社会参加をしてもらう、労働をしてもらうことを考えたとき、実は、都市での生活というのは限界があると、やはり自然との関わりが必要であると、僕は思っています。そういう意味で、もっともっと離れた地域、地方で高齢者が働きつつ生活できるシステムをどんどん作っていくことが必要だと思っています。「都市の高齢化」ということがいわれていますが、高齢化した人達が、地域、地方へ分散していく、そういう社会的な構造が必要だと思います。

高齢者は働けるだけ働いて、自分自身の暮らしのために、儲けるためではなくて、生きていくために働く、自分のためだけでなく、人のためにも働くということが、初めて労働が解放された形だね、新しい労働観が高齢者によって実現できると、僕は見ているんです。

～様々な運動がトータルに結びついていく形でない社会というのは、変わらないと思うのですが、その辺の展望はどう考えておられますか。

労働観というか、労働の概念というのが基本だと思いますね。今まで僕等が捉えてきた労働運動というのは、狭義の労働観だと思います。つまり、資本に対して貨幣で交換できる「賃労働」ですよ。

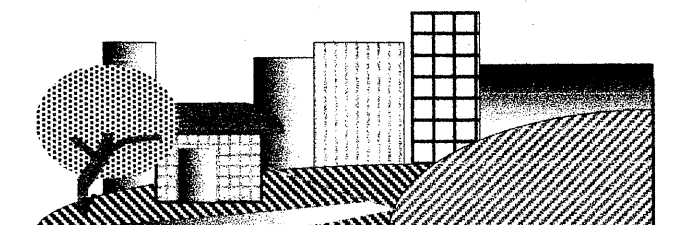
ところが、貨幣に交換できない労働があるわけですよ。家事労働とか、育児といった社会的労働ですね。それは、「賃労働」の労働を再生産するための労働であるというふうに言われてきた。違うんですね。対等なんです。親父の労働というのは、そういうものに支えられて始めて成立するわけでしょう。「わしが面倒見てやっているんだ！」という男社会の価値観が、今ぶちのめされているんですよ。

相互的作用によって成り立っている考える時に、生活と労働の概念は一緒に考えねばならないということです。それは、内山節さんが「労働過程論」という形で展開しています。戦後の労働運動が行き詰まってきたのはなぜなんだろうと考えた時に気がついたんです。

それから、第一次産業ね。労働運動はそれを切り離していたんだとね。自然の生産力なんてね、全く考えていなかった。僕等よりうんと若い哲学者の中で、労働をそういうふうに捉える人が出てきたのを知った時、自分の病気が一遍に治るような気がしたんですよ。

「生活トータルユニオン」という考え方もそこから提唱しているんですよ。ここ10年位のスパンで見れば、見るべき成果は残っていないですよ。しかし、21世紀を迎えた時には必ず主流になりうるだろうと思っています。生活も、労働も、自然も、全部存在しているのが地域でしょう。そこに僕の地域へのこだわりというのがあるわけですよ。もう北大阪全域だとか、大阪全域だとかね、全国だとかね、とてもじゃないけど自分のエネルギーは残っていない。ある程度限定して考えた時に、高槻にこだわってやってみようかと思っているわけです。そこでやる運動の質が大事だと。要するに、全大阪に、全国に、あるいは国際的に、必ずそれは通じる質をつくるということで、地域運動を展開する、そういう視点でやっていきたいと思っています。

(インタビュー／鴻池 博 文章まとめ／吉田信吾)



## 編集後記

17日の晩、杉並で未来はみんな  
でつくり隊が主催した『「市民の  
絆」で社民党を変える!』集会に参  
加し、帰りが遅くなりそうなので、  
家に電話をすると、高1の娘が、開  
口一番「大変だよ、象の檻の人が  
逮捕されちゃったよ。どうして国会  
は、アメリカの基地を置いておきた  
いんだらう、国民より大切な?む  
かつく!」とテレビのニュースを知  
らせてくれました。

昨年4月、希望21沖縄ツアー  
に参加し、機動隊の立ち並ぶ中を、  
象の檻まで一緒に歩いて感じた怒り  
や矛盾を、沖縄で直接会った知花さ  
さんが、傍聴席で不当逮捕されたこ  
とも感じたようです。

異例の早さで成立してしまった特  
措法。傍聴席でのそのときの悲鳴、  
怒号は沖縄の人々の怒りであり、沖  
縄の人々と連帯していた多くの人々  
の怒りです。なぜ国会に国民の声は  
届かないのだから。特措法に賛成し  
た国会議員に「チョーむかつく!」  
と、他人事ではなく捉えていた娘  
や、娘の世代の子どもたちは、将来  
この状況をどのように評価し伝えて  
いくのだろうか。(ち)

## 希望の21世紀宣言

私たちは、現在のモノ中心の社会を、人間が人間らしく生きること  
のできる社会へとつくり変えていくことをめざします。

人間らしい社会一人と人が平等に、ともに助け合って、人間が自  
然の一部として本来の姿で生きることのできる社会—を実現すること  
こそが、人々の希望です。私たちはそのために、あらゆる領域で民主  
主義を徹底し、民主主義をはばむものに対してたたかいます。

私たちは、世界に戦争と大国主義の不平等をもたらす憲法改悪を許  
しません。9条の理念の実態を日本から作っていくことによって世界  
の平和と民主主義の実現に貢献していきます。国と国とは対等平等の  
関係にあり、人間らしく生きることの豊かさの尺度に、人々のあり方  
を人々が決め、どこの誰も本当に武力を必要としない国際社会の実現  
こそが、平和の実現です。

私たちは、地域からの国の進路、世界のあり方を決定する政治的な  
力を作っていきます。そのために、私たちの意志、知恵や力を結集  
し、たがいの経験に学び合い、信頼を築き合いながら、自治の実現を  
めざします。何かに頼ることなく広範な人々とともに変革の力を作  
り、その統一を推進することを自らの役割とします。

世界の現実を変えること—それは私たち自身のあり方、運動のあり  
方を変えることなくしては実現できません。私たちは自らを変えあ  
う中で現実を変革していきます。本音を出し合い、あらゆる困難をとも  
に克服し、成功や喜びを、そして失敗や悲しみをも共有し、助け合っ  
てたたかひの輪を広げ、その中に新しい社会を準備していきます。

人間らしい社会の実現をめざし、世界の平和と民主主義を求める  
人々とともに、希望の実現に向けて進みます。

1部200円 定期購読をよろしくお願ひします!年間購読料3000円(送料込み)

郵便振替:00100-1-97125『希望の21世紀』

希望  
21  
century

月刊『希望の21世紀』●創刊19号●1997年4月20日

発行●「希望の21世紀」全国委員会 編集●希望三多摩

連絡先●希望21・三多摩

東京都日野市多摩平6-20公住219-5 三浦方 TEL&FAX 0425-82-2407

●希望21・京都

京都府京都市中京区丸太町通柳馬場西入る鍵屋町75東洋ビル3F COM京都気付  
TEL 075-212-2455 FAX 075-212-2456

●希望21・未来はみんなでつくり隊

東京都杉並区高円寺南2-39-15 光荘203 菅原方  
TEL 03-3310-4553 FAX03-3223-0468

●希望21・神戸

兵庫県神戸市灘区森後町2-1-7 斎原ビル302  
TEL&FAX 078-843-7626

●希望21・大島

東京都大島町元町字小清水273尾形方 TEL&FAX 04992-2-4708

●希望・大阪

大阪府守口市外島町6西1-1709井本方 TEL&FAX 06-997-2062